

どの子どもも輝き
笑顔いっぱい
とねがわ幼稚園

とね幼だより

よい頭・よい躰・強い体



令和元年 6月

子どものことば・姿から、子どもを理解する。 園長 笛木 哲
小説の中の母と娘(4歳)の会話です。娘「男と女はどうちがうん？」母「もう少し大きくなり薫ちゃん(娘の名)が、この人と結婚したいと思う人が男。」娘「ほならママは男なん？」母「ママは女だよ。」娘「どうして？ 薫はママと結婚したいもん。」

薫(娘)が「結婚したい」と思うのはママです。「結婚したいと思う人が男」という母の答では、ママは男になります。子どもが、最初に出会う憧れの大人、結婚したいほど大好きな異性は、ママやパパです。「大きくなったらパパ(ママ)と結婚したい。」って言われ、幸せで、くすぐったく思ったことはありませんか？

保育者が集めた子どものことばをご紹介します。

○子どもの頭が集まり地面を見えています。年長A君は「死んだミミズだ。アリがえさにしようと運んでいるんだ。」、年中B君は「ちがうよ。焼きそばだよ。」と、どちらも譲りません。

大人が見れば答えは一目瞭然ですが、当の子ども達は真剣です。答えを教えるのは簡単ですが、「焼きそば」という見立てが何ともユニーク(外で焼きそばを食べてこぼした経験があるのでしょうか)です。経験から発想する子どもの思いは大切にしたいですね。



○年中Cさんは、「ニワトリの名前はチャボだよ。もう名前がついているよ。」

ウサギの名前が決まった日、「チャボにも名前を付けてあげなくちゃね。」と話した時のCさんです。『チャボ』(ニワトリの品種名)を、ニワトリに付けてあげた名前だと思い違いしているのです。こういう思い違いは大人にもあります。真実を知った時、大人は赤面しますが、子どもは「そうか！」と納得します。

○母の日のプレゼントづくりをした時のこと。カーネーションの花を貼る前の葉だけが描かれている絵(台紙)を見たDさんは、「枯れちゃっているね。」と一言。紙花で作ったカーネーションをのり付けすると、「あ、お花がさいたよ。」と満面の笑顔に。

子どもの発想、表現力は何て素直で、新鮮なのでしょう。嘘も誇張もありません。

○帰りのバスの中。発見した虫が動かなくなります。しばらくしてムズムズと動き出すと、年長E君は、「生きていてよかった。死んじゃったと思った。勘違いしちゃったよ。」と声にします。すると年少の子達が、「勘違いしちゃった。」「勘違い。」「勘違い。」と連呼しました。

年少の子に「勘違い」ということばの意味はよく分からないでしょう。でも、年長さんの使った「勘違い」という言葉が、子ども達の心の琴線に触れ、面白くなってしまったのです。異年齢が混じり合う集団生活の中では、日常生活の中で、自然と語彙を増やしていきます。よいことばも、悪いことばも。

○雨が降り、外遊びが出来ない日の帰りのバスでの会話です。年長F君は「雨を全部、ぼくが飲み込んであげるよ。そしたら皆、外遊びができるでしょう。」そのことばを聞いた年少G君は、「雨を全部飲んでしまったら、お外のきれいなお花が咲かなくなるよ。」

外遊びをしたい幼稚園の友達のために雨を飲み込んでやろうとする優しさと、それはそれで嬉しいのだけれど外で咲く花へも温かな眼差しを向ける優しさ。こういう子ども達と過ごせる幸せを感じます。

○鬼交代のために子ども達を集め、「鬼」と言ったとたん、私の『差し歯』が口の中から飛び落ちました。それを見たH君は、「園長先生、歯が抜けたね。おめでとう。」と祝ってくれました。

歯が抜ければ、新しい歯が生えてくる子どもと違い、私の差し歯は新しい物に交換できてもニセモノ。子ども達の真っ白な歯をうらやましがりつつ、優しい子どものことばに癒やされました。

○「園長先生、チャボが卵を産んだよ。」と両手に大切そうに包んで見せてくれました。年長Jさんは「温めて、ひよこにしよう。」。年少Kさんは「水の中に入れてあげなくちゃ。」

身近に、お米を育てている方がいて、大切な種籾を水につけ、芽を出す様子を見たことがあるのかもしれませんが。生き物が生まれるときは、水の中に浸す必要があるのだと、その時、学んだのでしょう。



ままごとハウスのかき氷屋さんは、バケツに砂を山形に盛りつけたかき氷を販売しています。(バケツいっぱい砂を入れたので『美味しい』ではなく)「重い、重い、かき氷はいかがですか！」

子どものことば(発想)を面白がり、楽しむ本園の保育者です。発想の元になる子どもの思いを知り、想像することから保育は始まります。さて、そんな本園の保育者の自慢の一つは、『臭いで勝負』です。課外活動で園庭を使った卒園生の忘れ物には、名前が書いてありません。保育者はバッグに入った中身を取り出し臭いを嗅ぐと「これは〇〇君のだ。」と即答します。そして、それが見事に当たっているのです。まさに『違いが分かる保育者』です。

お礼とお願い

○引き渡し練習では、強い日差しの中ご協力いただきました。毎年行う練習に「意味があるのだろうか？」と思われるかもしれませんが、想定できない災害に備え、安全に園児を保護者に引き渡すことが、私たちの責務です。そのための重要な練習です。貴重なお時間をいただきましたこと感謝します。ありがとうございました。

○園では皆様からいただいた雑巾を大切に使用させていただいています。掃除をしていた保育者が「痛い」と声を上げました。雑巾にまち針が縫い込んであり、その針先が指に当たったのです。幸い怪我はしませんでした。が、「もし園児が使う雑巾だったらと…」と思うとぞっとしました。手作りの雑巾は、使いやすくありがたいのですが、針を縫い込むことがないようお願いいたします。

日々の保育

いつもと違い自由席で食べる特別な雰囲気『レストラン給食』が、子どもは大好きです。その際、誰の隣に座るかは、最大の関心事です。しかし、教室には「どうにか思いを通そうとする子、逆に我慢してしまう子」と様々な性格の子がいます。年長児であっても今の時期は、「相手の思いは分かるが、自分の気持ちが優先」します。

保育者は、一人でも悲しい思いをしている子どもがいれば見逃さず、「お互いの気持ちに歩み寄り、どうしたら納得できるか、解決できるかを少しずつ自分たちで考えていけるよう」にじっくり時間をかけて保育を進めます。保育者が主導して、その場だけの解決を図っても、子どもの心が育たないことを知っているからです。時間はかかりますが、時間をかけるからこそ、自分たちの力になります。



6月の歌「あめふり」